

## 女太夫（七小町容彩）

へ理りや 賤しき身にも糸竹の 道嬉しくも其名さへ へ女太夫と  
夕立の 晴間いとうて取出す 身は三味線の可愛らし へお屋敷さ  
んの お窓下 立たせて いたこ新内に 仇とその名も鳥追の へ月  
待日まちだいまちや その町々を門付も あぢな世渡り四つ竹に  
へひがし上総のいちみのこほり 村のこなをばかねをき村よ へひきだ  
源兵衛が惣領息子 へ相撲取にて白藤源太 その白ふぢに あら  
ねども ひとり相撲を 色に持ちや ほんに口舌の土俵ぎわ 突出  
さりやうと 気がぢれて 百手どころか 新手を出して 取組んだ  
日は 何んのその へ酒と肴で六百出しや 気まよ 我儘のかは  
世の中を 思へば三日忘れぬ 身は気散ぢやないかいな へ色の調  
子も合の手に へわしにサ逢いたくば 上州前橋敷島河原の 小砂  
利交りのあら砂を持って来て 紙へ 包んで袂へ入れて わしがお寝間  
の三尺小窓の 小障子の間から 姿隠してばら／＼と蒔きやれ や  
んれ 面白や へかゝる契りのありもせめ さりとては又雨晴て 雲  
間／＼に入りける